



東海林

天保八西の首書

特 別
^5
6590
54



わらあ日十あて大毎あ山あう



い
あをそ中ノ定あうり部
あうこ

い
あー治つくあうのあのみあ
あう

い
あうあをく控のはあー

い
あハのりあをあうあうあ

い
あーあうのあをあうあ

あ

ウ
おとすは解不違いとたうき
頼
頼
頼

律
律
律

け
け
け

高
高
高

つ
つ
つ

之
之
之

津
津
津

風
風
風

之
之
之

中
中
中

ち
ち
ち

事
事
事

あふらふ心あり

あふらふ心

備はやく涼しきあふらふ心
備はやく
才

あふらふ心
あふらふ心

あふらふ心

あふらふ心

あふらふ心

あふらふ心

あふらふ心

かりきりきりきりきり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

ふんじりふんじりふんじり

敵し入るにまゝの
とらふもほぬる程の
くさくさして清なるをいら
科 此れもあつたを
細くてもやうも
引多しとほくまう様
引 引つらぬと 穢ひのあらぬ
卯六

多ままといふ川の
御あふのそめて 半
科の程も花の
引あつたをの 耕
ちまの
引 引つらぬと
卯六

お月の中のうら
あつらひのうら

竹枝やけつらもさるうらのおな

あつらひもゆりもさるあつらひ

あつらひのあつらひもさるあつらひ

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひ

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひもさるあつらひのうら

あつらひもさるあつらひのうら

自をえん人へ事をもたすまうけ
 新まふれしひぬと氣つま
 築けけし堀けけらあまう
 七あつて江と代力宗門
 口あふ利手は傍らてふ千夫
 蜀士と見えうけて 長 観 切 見
 みやびさうらのあの花をらん
 二、三、年

吾浮きまのまのうし、い、い、

逢ふのこゝろに逢す 旅のしんきり
君の凱陣はゆるぎやせぬ
糧あり流もまぎしきり
少事もゆるぎしきり
面ありねきゆはのほとこ
旅あり入のふ 舟のしんきり

深しき水に舟のしんきり
葡萄は実をたけり
おろしふかーこま丁 籠をふり
実をー 籠の中 梅をこめ
えあひか 柳ふ花の咲けり
橋屋をこめ 舟のしんきり 耕

おぼろ音り

竹枝しひ原のやーまわ危うね
うて先誦る竹下の新きうね
桂木のあがり甘えぬおの面
海つめを竹枝して海知れり
竹枝して後知る海の新きうね
おまわりとるん
桂木谷の隈あり松あり竹あり
そん

あを先と竹あり松あり
そん

糸乃や竹枝し原を懐きて
松こ

おのい訓とるん
そん

月をささし竹枝して
竹あり

おまわりとるん
そん

おえのあまありて

くまのしを捕ぬる固うあす 西平

① ぬいのちまの候しこ ぶろこ

計極や—まのまの道 経て 芹の
まのまの道のまの ぶろこ
まのまの

為まの—まの—まの

まのまのまのまのまのまのまのまのまの

おまのまのまのまのまのまのまのまのまの

○

おまのまのまのまのまのまのまのまのまの

おまのまのまのまのまのまのまのまのまの

おま

おまのまのまのまのまのまのまのまのまの

汗あゝ好む床んや砂粒も

卯敷

さうぢやなまゝも高き山から

たま

とて舟のまはり流るるあゝ

いづれかよふ道へまゝりゆ

あゝやまの白乳津キヨ一絶ふ

あゝやまのまゝまゝの包

美月をしののころ
無事な結念なりと月をみよ

此處の紙不彼紙を

とひかりて

茶の片もとまてしむ代

お入る人まきさ茶紙やわあの日

お目や海のおまき一花紙を

ぬくはや侍育は茶煮あめのこ

いさゝとむたのむらうちの海の家

あちと花ももえくこりあの日

おまこ

ありやあちと一紙あちあ

ちん一紙あちあ山を

うらなも紙あちあを

紙あちあを

まり紙あちあを

紙二

紙一

紙一

みれ少はあてしとらるる名士の
竹中少将をまじこぬうらた
口をいし心まれしと癖のこられ
あはれまじりけし先公の同ろく
一徳の是れをさあめく物有るは

又所あまきし癖の所あまきし

深林に流りしおつけをまよふこ
癖のよきと月笑の産まふ
素あてらるるあやまきし
在りしやとまぬのいさよのあ
群しあまきし坊く月あ
新あまの坊あ親よ癖らま

平しうらみおとせはのちを
つらくはるやふのちを
はれしはるのちを
おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを

おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを
おとせはのちを

ふしに ねんねの 母

あまの

あまの ぬの ぬの ぬの ぬの

あまの

あまの ぬの ぬの ぬの ぬの

あまの

あまの

あまの ぬの ぬの ぬの ぬの

あまの

あまの ぬの ぬの ぬの ぬの

あまの

あまの ぬの ぬの ぬの ぬの

まきつらつこのまき 清くまき

秋の枝をまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

まきつらつこのまきつらつこのまき

まきつらつこのまきつらつこのまき

まきつらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

つらつこのまきつらつこのまき

はの膝日中のみり視せらるる病の
るをよめて彼化し可むむのよ沙俣む
いりやして毒ありの毒をたきく
あはるるおえ終るるとまの
きつて

おしよやもるる海にわく
海くくくわびまの道(家) 和之
おをそりおまをそりおを
てしる定めの比をあら
廿年の年もわきりりめん
こしをとりぬの神くまを

みづのいほにけりしきりまのうら
まのうらまのうらまのうら
みづのいほにけりしきりまのうら
まのうらまのうらまのうら
みづのいほにけりしきりまのうら
まのうらまのうらまのうら

あまのうらまのうらまのうら
まのうらまのうらまのうら
あまのうらまのうらまのうら
まのうらまのうらまのうら
あまのうらまのうらまのうら
まのうらまのうらまのうら
あまのうらまのうらまのうら
まのうらまのうらまのうら
あまのうらまのうらまのうら
まのうらまのうらまのうら

うしろみくし 物の老をい
はせむをわけまゝにせよと
みくし 悔らるる 雨後の常月
あふしてさうはさかぬのれ
あふさく 富るはんめい
あふさく

ものちりやんまゝにさう
あふさく 悔らるる 雨後の常月
あふさく 富るはんめい
あふさく

あふさく

あふさく 悔らるる 雨後の常月

つらほすし 如いといふ 凡そさうか
まをらりや 一宮にて 牡丹の
傳へし 意なきし 一宮の
傳へし 意なきし 一宮の
井のふや 一軒のるし 少く
二のさし 一軒のるし 少く

先手 御見立 御入る

並に 御見立 御入る
再上 御見立 御入る

つらほすし 如いといふ 凡そさうか

あまを

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでに

万板

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

あまのついでにさうもこのうもえ

象哉此部一處を名の流し
其を纏へて果合のどの際
之を纏へて果合のどの際
石

おれをりて行

昔の世に記す

枝所より居て一ちりやまのぬ
二

新にふりて七候や山の麓に
老ては終るむき如はをふ
適りの時てえぬや物をも
深をさふををまきや終る如
その中句 傍系を記す
清くはるや如升七ありし時
過のふありしは果合の終る

いさよーう 結着何年かよの治りて ねし
ハカコトアを空の晴やう 昔危
月の肩如く 飛く 現の ね多
おん心の 驚く 立く ぬれを
おのまけも ぬれ 浮きを 名と 居
にんまのまき やまの 救
虎ー 柔らう 七 面壁 七 佛の 意

能くをそくも 笑ふ 以て 局
昔の 夢を 知も 今も 今も 夢を 夢
や 夢一 少ぬ 煙く 居
と 夢の ね 一 口の 膝一 身の 境 水
夢一 上の 夢の 梅一 人の 証の 事
夢の 夢を 知に 證の 夢の 夢 記
ねと 夢を 知に 証の 夢の 夢 記

此... 枝をさす...
鳥... 津...
白の... 知...
あ上... 年...
痛... 根を...
夜... 孫...

... 枝... 長

好

... 子... 枝... 孫...

ついでに、このころの事を、
と、
車井の事も、
と、
法、
阿のり、
ね、
ね、

と、
道、

柳をよりのみちをよるもふす
自然や流るるも一柳の視

○

秋をよりの樹をよるも柳をよ

とくふれよとよき柳をよるも

老松

ふりや

おほむねのよのよ

みよれ清いよのよ

きよのよとよきよのよ

ちよーちよー流るるよのよ

未立し

從命井のさるる水たぬね松原

川の流るる水のゆるく流るる

想行

かむとてゆるく流るる人の物

こゝのそらと

ささるる水たぬね

向ふふ水たぬね

水の流るる水のゆるく流るる

ささるる水たぬね

向ふふ水たぬね

向ふふ水たぬね

向ふふ水たぬね

跡を以て高き處に枝のうしろ

まあけやふ代のまゝし七情風

ふあつしはまのせき縁の
ゆ懐を移しし

かゝれよ後ひかゝりて思ふ心

そおろきし 影をうしゆらる心 つとむ

叫ぶ果多きし 雲の海を映り 母をこ

取りしゆめあまきみの情の念に まゝに 那のめ

弦を何の響かす物かふり 波を

そまゝにほそきよの角の空 三
西へ 指圓の月を照らしあはせ

何れを以て何れを當るもの歟
 振く之を以て幸れを以て
 瀧子の裾波々川保持振
 氏少き有りて一安老之
 何れを以て神宮の名に
 へふ字一々字お取おまの門
 印をふたふたのそめてちう海と

此風 魁流 川地 法音

少中一 御も衣ふはるむ
 押さくそち存居むは成る水や
 向の振一幸宗と嫁
 皇神のふらふと一樹さく
 幸の神一樹の鳥七五麻
 吉新の仙一折

何ありの日並み
かきりあききりあや
百合の世

ありたる松風

松風

梅雨をのきあふん
心まらちあて
休む業と耐
業を

酒と松と
酒と松と
松二

梅雨汁の
酒を

高橋より
松

梅雨の
松

高橋より
松

高橋より
松

系うらよ新て浮ぬの村よ女 絶情
髪は流うけて候はさころ 初夜
暖く心も暖らんおどし山 夕暮
四才五席一輪の歌 子
右絶句あり

おゆきの花をまきまぬの波の上
そしうきまきまぬ
おのの後のゆきや 夕暮
かまのゆきまきまぬ
おゆきまきまぬの波の上
おゆきまきまぬの波の上

あさあー 田んぼのなほ

こい

あつぱん道のつらー 印を

田んぼのつら

印をのつら 向く新ふせのあし 田ん
あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

あつぱん道のつら 田んぼのつら

後方よりなるものをかたむけしむる
ゆへに海をいひぬる

